

 Japan Spinal Cord Foundation	SSKU 特定非営利活動法人	[季刊] No.82 2019-9
	日本せきずい基金ニュース	

事務局からのお知らせ

Walk Again 2019開催にあたって―― たくさんのお申込み、ありがとうございます

前号でお知らせした「Walk Again 2019 いよいよ始まる 脊髄損傷の再生医療」は受付早々に定員に達しました。10月12日(土)は、会場いっぱいに車いすの当事者と家族、脊損医療に従事する専門職の皆さんのが集まり、脊髄損傷の再生医療についてともに学び、ともに考える場となります。

神経再生医療への関心の高まりを反映し、今年は例年になく参加申込みの出足が早く、受付初日の7月1日には待ちかねたように100名を超すお申し込みがありました。翌週9日の昼過ぎに、あらかじめお伝えしていた定員250名に達したため、同日17時にウェブフォームを閉じました。ウェブフォーム閉鎖以降、FAXでお申し込みをいただいた皆さんにはハガキで受付終了をお知らせしています。

今年は当日受付枠は設けませんので、会場ホールにご入場いただけるのは、当事務局から郵送したご案内状をお持ちの方だけとなります。ウェブ中継についても多くの方からご要望をいただき、これまで一度ならず検討してきましたが、講演中のスライドには未発表の動画などが含まれるため、不用意に拡散されるリスクを完全に払拭できない限り中継はできないという判断に至りました。登壇される先生方、研究の進展を長く見守ってきたたくさんの当事者、医療関係者の皆さん、相互の信頼関係があつてこそ、このように立場を超えた学びの場が実現できていることを、どうかご

理解ください。

お申し込みをいただきながらご希望に沿うことができなかつた方々には、この場を借りて改めてお詫び申し上げます。来年1月末をめどに制作する報告書は、当日の講演とパネルディスカッションの内容を最大限、誌面に再現できるよう努めます。刷り上がり次第、ホームページで告知し、ご希望の方に無償で配布する予定です。

当日のプログラムの流れは、中村雅也先生(慶應義塾大学)、安達喜一社長(クリングルファーマ)、藤原康弘理事長(PMDA:医薬品医療機器総合機構)の講演の後、山中伸弥先生(京都大学iPS細胞研究所所長)のビデオメッセージ、パネルディスカッションとなります。パネルディスカッションには、iPS細胞由来神経前駆細胞移植の臨床試験において移植後の患者のリハビリーションを担う国立病院機構村山医療センターの副院長・谷戸祥之先生も加わります。会場で頒布する当日資料は、講演内容をより深く理解するための資料として当基金制作の冊子とPMDAからご提供いただいた詳しい業務案内。そのほか主催団体の紹介やお勧めの書籍、企業協賛のコロプラスト、J-Workoutなどのお知らせ一式を、全脊連60周年、日本せきずい基金20周年を記念してつくったバッグに入れることになりました。

来年のWalk Againの企画もすでに始まっています。Walk Again 2020は、琉球大学医学部整形外科の西田康太郎教授のご協力のもと、10月もしくは11月に沖縄で開催します。首都圏でも、東京2020パラリンピック期間中に「SCI Day」(脊髄損傷の日)の日本で初めてのイベントとして、国際脊髄障害医学会(ISCOS)、日本脊髄障害医学会、全国脊髄損傷者連合会との共催で一般市民公開講座をおこなう予定です。それぞれ内容詳細、申込み方法等は日本せきずい基金ニュースとホームページでお知らせします。

目次

事務局からのお知らせ

Walk Again 2019:たくさんのお申込み、ありがとうございます p.1

再生医療研究情報

Muse細胞製剤「CL2020」:脊髄損傷の臨床試験開始 p.2

BDNF mRNAをマウス脊髄損傷部に投与して治療 p.3

ブックガイド

坂井めぐみ著『患者』の生成と変容 p.4

理事会からのお知らせ

第21回日本せきずい基金定期総会の報告 p.5

ドリームキャッチャー

中村珍晴「君と出会えた奇跡」 p.6

国内ケア情報

身体障害者対象の性カウンセリング p.8

事務局からのお知らせ

設立20周年:これからもよろしくお願いします p.8

Muse細胞製剤「CL2020」脊髄損傷の臨床試験開始

生命科学インスティテュート(LSII)は7月、Muse細胞製品「CL2020」の脊髄損傷を対象とした臨床試験を開始すると発表した¹⁾。対象は亜急性期で、目標症例数は10人。おもな評価項目を有効性とし、副次的項目に安全性を設定した。

Muse細胞(ミューズ:Multi-lineage differentiating Stress Enduring cell)²⁾は、2010年に東北大学の出澤真理教授らのグループが発見した分化多能性をもつ間葉系幹細胞。静脈から投与すると体内の損傷部に遊走して、傷害された細胞に分化し成り代わることが知られている。患者本人の細胞でなくても免疫拒絶反応が起きないので、コンディションのいい細胞を選んであらかじめ薬を調製しておけば、患者が発生したときに適切なタイミングで投与することが可能である。同社は、T10損傷動物モデルでヒト細胞製剤CL2020を静脈投与して運動機能評価が改善したとしている³⁾。

2018年から急性心筋梗塞、脳梗塞、表皮水疱症で臨床試験が始まっており、脊髄損傷は4つめの疾患となる。LSIIは、2020年にCL2020の製造販売承認申請を予定しているが、まずはどの疾患から申請するのかは明らかにされていない。

現在札幌医科大学で治療を実施しているステミラック注の場合、同じ間葉系幹細胞でも患者本人の細胞(自家細胞)を採取して培養するため、投与まで6週間かかる。脊髄損傷の臨床試験を実施する医療機関の一つ、筑波大学医学部整形外科教室の國府田正雄准教授は、「他家細胞のMuse細胞は製造過程であらかじめ調整できるため品質を一定に保つことができる」と説明⁴⁾。

LSIIも、おもに他家細胞である点に事業の採算性を見出しており、将来的にはMuse細胞による脊髄損傷治療の対象患者として年間約200人を想定している⁴⁾。

細胞加工施設は2018年10月に神奈川県川崎市に竣工(殿町CPC)。今年2月から稼働しており、7月に再生医療等製品製造業許可を取得済み。臨床試験用のMuse細胞製品はこの殿町CPCで製造される。

●参考資料

- 1)株式会社生命科学インスティテュート(LSII):2019年7月9日プレスリース
- 2)日本せきずい基金ニュース no.75:2017年12月
- 3)非臨床試験につきデータ未提示(LSII)
- 4)日刊薬業:2019年7月9日

AD

BDNF mRNAをマウスの脊髄損傷部に投与して治療

東京医科歯科大学の位高啓史教授らのグループが、メッセンジャーRNA(mRNA)を用いて、脊髄損傷モデルマウスの損傷部にBDNF(脳由来神経栄養因子)を発現させ、特定の期間に一定の運動機能改善を観察した。

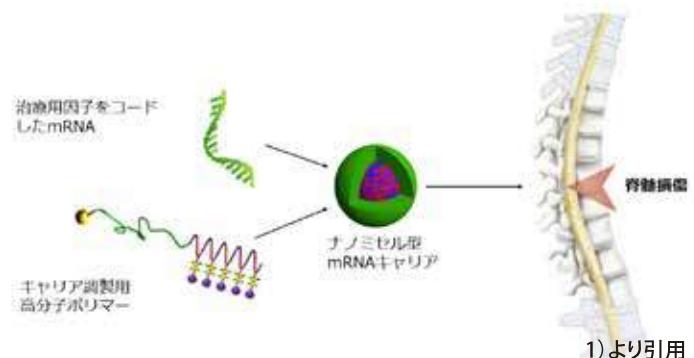
mRNAは細胞内でタンパク質を合成するコードを伝える物質で、さまざまな疾患の治療に利用できる可能性に注目が集まっている。目下の課題は、寿命の短いmRNAを目的の組織に到達させ目的のタンパク質を発現させるためのデリバリー方法の開発。同グループは、ナノミセルと呼ばれるポリマー製の極小のカプセルに二次損傷の抑制効果が知られているBDNFをコードしたmRNAを入れ、損傷部に注射で直接投与した(図)。発表された論文²⁾では、投与3日後にBDNFの発現がピークに達したことや運動機能の変化を示すデータも掲載されている。

この研究はおもにmRNAを局所投与する方法とその有効性を明らかにするためにデザインされたもので、直接ヒトの脊髄損傷治療へと結びつくものではないがmRNA医薬の実

現を目指す大学やバイオベンチャーでは、同じ中枢神経系である脳への適応も視野に入れて開発が進められている。

●参考資料と論文

- 1) 東京医科歯科大学プレスリリース：メッセンジャーRNA医薬を用いた脊髄損傷の新たな治療法を開発, 2019年7月4日
- 2) Keiji Itaka, et. al: Enhancement of Motor Function Recovery After Spinal Cord Injury in Mice by Delivery of Brain Derived Neurotrophic Factor mRNA, Mol Ther Nucleic Acids, Jun 29;17:p.465-476, 2019.



AD

ブックガイド

「患者」の歴史が指示するもの

かつて脊髄損傷はもれなく死に至る疾患だった。人工呼吸器のない50年ほど前まで高位損傷者はひとたまりもなく、急性期をしのいだ患者たちも、数か月のうちには褥瘡、肺炎、敗血症といった合併症に次々と斃れていった。

本書は19世紀後半、西洋から外科学が入ってきたばかりの時代から、脊髄損傷患者にどのような治療がおこなわれてきたか、医師や患者たちがそれをどう記述しているかを丹念に書き起こしていく。

戦争が起これば、戦地で脊髄損傷を負う者がある。“名誉の負傷”から回復して手仕事に取り組む戦傷者を国民の手本として称揚するために国は専門の治療施設と生活施設をつくった。専門治療施設での試行錯誤により脊損医療は少しづつ進展し、リハビリテーションがおこなわれるようになり、退院後の集団生活のなかから全国脊髄損傷者連合会の前身である社会運動体が生まれた。炭鉱事故と労災保険、モータリゼーションと自賠責。車いす、フローリング、バリアフリー。産業構造や一般社会の暮らしぶりの変化は、脊髄損傷者個々の生活とニーズにも常に大きな影響を与えてきた。

そして神経再生医療研究が世界的に本格化した1990年代後半には、臨床研究に積極的に関わっていく患者たちが顕在化する。本書には、嗅神經被覆グリア(OEG)移植、骨髓間質細胞移植などへの日本せきずい基金の関与についても2章を割いて詳しく記述されている。

本書がテーマとする“「患者」の変容”は、医療の進歩やそれに伴う健康観の変遷、そして社会の変化と常に密接に関わり合いながら起こってきた。こうして歴史として記述されたものを読めば、脊損医療は少しづつ確実に向かっていることがわかる。だが、1960年代から患者たちがその必要性を訴えてきた包括的治療機関「せき損センター」の全国的な整備は半世紀を経てまだ実現していない。現代を生きる私たちが先人から託された大きな課題である。

脊髄損傷に関わるどんな立場の人もこの本から多くの発見を得るだろう。関連学会誌や患者会の記録、行政資料等、星の数ほどの資料の一言一句に誠実に向き合い、この労作をまとめた筆者に敬意を表したい。



『「患者」の生成と変容』
坂井めぐみ著、晃洋書房 本体5,200円+税

AD

事務局からのお知らせ

第21回日本せきずい基金定期総会の報告

2019年6月2日（日）に目黒区心身障害者センターあいアイ館にて、第21回定期総会を開催しました。理事全員の承認を得た活動計算書をここに掲載します。

書式第13号（法第28条関係）

平成30年度 活動計算書

平成30年4月1日から平成31年3月31日まで

特定非営利活動法人日本せきずい基金
(単位:円)

科 目		金 額	
I	経常収益		
1	受取会費 受取会費	0	
2	受取寄附金 募金・寄附金	11,350,232	11,350,232
3	受取助成金等 受取助成金 受取助成金	6,410,000 700,000	7,110,000
4	その他収益 受取利息 雑収入	2,483 11,730	14,213
	経常収益計		18,474,445
II	経常費用		
1	事業費 (1)人件費 人件費計 (2)その他経費 募金活動事業費 脊髄再生促進事業費 脊損支援事業費 広報活動事業費 その他経費計	0 143,489 1,074,304 3,636,178 2,663,954 7,517,925	7,517,925
2	管理費 (1)人件費 人件費計 (2)その他経費 通信費 荷造運賃 水道光熱費 旅費交通費 交流費 会議費 事務用消耗品費 備品消耗品費 修繕費 新聞図書費 地代家賃 保険料 租税公課 諸会費 支払手数料 減価償却費 業務委託料 雑費 その他経費計 管理費計	215,278 4,992 101,513 239,860 11,474 26,306 89,304 48,432 10,000 42,336 1,475,999 30,900 6,250 17,000 152,915 39,199 2,640,000 900 5,152,658	5,152,658
	経常費用計 当期経常増減額		12,670,583 5,803,862
III	経常外収益 経常外収益計		
IV	経常外費用 経常外費用計 税引前当期正味財産増減額 法人税、住民税及び事業税 当期正味財産増減額 前期繰越正味財産額 次期繰越正味財産額		0 5,803,862 5,803,862 25,156,507 30,960,369



「君と出会えた奇跡」

たかはる
中村 珍晴

「桜の樹の下で」出会ってから

2007年9月、当時大学1年生だった私は、アメリカンフットボールの試合中に首を骨折し、頸髄損傷(C6)となりました。その後、2年半のリハビリ生活、復学、大学院進学を経て、現在は、大学教員として教育と研究に励んでいます。

ところで今年の4月にドラマ「パーフェクトワールド」が話題となり、脊髄損傷者の恋愛や結婚について注目が集まりましたが、私自身も昨年の9月に妻と結婚しました。

妻とは、健常者の頃からの知り合いというわけではなく、車いすで生活するようになってから出会いました。出会いは「桜の樹の下で」と言うと聞こえがいいですが(笑)、お互いが通っていたスキューバダイビングショップ主催の花見がきっかけです。この場で、初対面とは思えないほど意気投合し、後日、二人で食事に行くことになりました。当日、待ち合わせ場所は大阪駅。2週間ぶりに再会した妻が最初に発した言葉にとても感動したことを今でも鮮明に覚えています。それは「私、サポート方法がよくわからないから、手伝いが必要なときは言ってね。」という一言です。当時は、初対面の人の過剰な気遣いに「大丈夫です」と返答することに気疲れしていたので(贅沢な悩みですが)、ほどよい距離感で接してくれる妻と過ごす時間が心地よく、この日はあっという間に時間が過ぎました。そして、出会って1か月後に勇気を出して告白し、お付き合いがスタートします。

尿漏れアシデントがもたらした決意

私には膀胱直腸障害があるため、まれに尿が漏れてしまうことがあります。そのため普段は尿とりパッドで対策をしていますが、付き合って半年後のある日、自宅で妻と過ごしているとき、コーヒーの飲みすぎが原因で尿が漏れたことがありました。しかも、運が悪いことに尿とりパッドがずれていてズボンが濡れていたんです。当時は妻へ障害の症状について詳しく説明していなかったため、(やってしまった～)と心の中で後悔しながら、おそるおそるズボンや尿とりパッドの交換を手伝ってほしいとお願いしました。

もしかしたら、嫌われてしまうかなとビクビクしていると、妻は意外にも「いいよ!パッドはどこにあるん?」とあっけらかんと対応してくれました。「軽いな!!(笑)」と思いましたが、別れを覚悟するくらい怯えていた私の気持ちをスッと包み込んでくれたこの瞬間、この人と結婚したいと強く思いました。人生で唯一、膀胱直腸障害を抱えて良かったと思った出来事です。

そんなことがあってから1年後、現在働いている大学への就職が決まり、思い切って妻へプロポーズをしました。妻は快く受け入れてくれたので、その後、結婚の挨拶をするために妻の実家へ行きましたが、すんなりと祝福されたわけではありません。ご両親から「本当にやっていいけるのか」と厳しいことも言われました。確かに大切な娘が、障害のある男性と一緒にになると聞いて、不安を感じないという家族は少ないと思います。だからこそ私は、妻との結婚に対する覚悟を必死に伝えました。なぜ結婚したいのか、仕事はどうするのか、など自分の言葉で伝えました。

その後、少しづつ理解を示してくださいり、最終的には皆さんの祝福を受けて、晴れて夫婦になることができました。ちなみにご両親は、今では本当の息子のように接してくれます。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

互いに欠けているものを補い合って

結婚して1年が経ち、改めて妻と出会えたことに感謝しています。障害を負って多くの自由を失いましたが、あの日の事故があったからこそ妻と出会い、そして結婚することができました。私には障害によりできないことがあります。一方で妻にも苦手なことがあります。障害の有無に関係なく、誰もが何かしら欠けているものを抱えています。そして、その欠点をお互いに補って歩んでいくことが夫婦なのかなと今はそう感じています。

これから先の人生で、私たち夫婦には乗り越えなければならない困難が待っているかもしれません、焦らず二人のペースで歩めたらと思います。そして、いつか二人の子どもを授かることが私たち夫婦の夢です。

国内ケア情報

身体障害者対象のセックスカウンセリング

脊髄に障害をもつ人の性と生殖について、看護の立場から研究に取り組んでいる道木恭子先生によるセックスカウンセリングが始まりました。

障害のある人は性機能障害を伴うことが多く、勃起、射精の問題、性行為中の尿便失禁、性的感覚の欠如、身体の変形などさまざまな悩みや不安を抱えています。そして挙児も重要な問題となります。しかし、こうした悩みを相談するために医療機関を受診する人はほとんどいません。性に関して相談することへの抵抗感に加え、性機能障害の検査や治療およびセックスカウンセリングを受けられる病院に関する情報不足も大きな理由です。

このセックスカウンセリングは、性に関する正しい情報を提供し、医療が介入すべき問題については適切な受診科につなげることを目的としています。安心して相談できる環境と時間を確保するため、専用のカウンセリングルームで相談を受けます。このカウンセリングは日本性科学会の協力のもとに実施されており、予約受付は同学会でとりまとめています。詳しくは囲み情報をご参照ください。

●対象者

身体障害者手帳をもっている人。カップル、家族、代理人でも相談可。

●相談場所

日本性科学会カウンセリングルーム（東京都文京区）

※来所できない相談者には電話でも応対可。電話相談の場合も予約の取り方と料金は同じ。

●相談時間と料金

50分、5,000円／1回

●相談日時

毎月第1日曜日の10:00～14:00

●カウンセラー

道木恭子（帝京平成大学看護学科講師）

●予約方法

・電話での予約 03-3868-3853

受付時間 月・水・金の10:00～13:00（祝日休み）

・メールでの予約 jass@beige.plala.or.jp

※お名前とご相談内容を送ってください。

事務局からのお知らせ

設立20周年：これからもよろしくお願いします

日本せきずい基金は、今年10月25日に設立20周年を迎えます。神経再生医療研究の支援、脊髄損傷に関する相談や質問一つひとつをともに考え解決していくこと、脊髄損傷の臨床・福祉の現場に正確でかつ最新の治療・ケア情報を届けることに取り組んできました。

最先端の研究と、臨床・福祉の現場と、そして地域に暮らす脊髄損傷者は、決してバラバラに存在しているわけではありません。それぞれの課題をフィードバックし合い、情報を共有する場として、当基金はシンポジウム「Walk Again」、せき損研修会、相談事業を実施しています。今号

に同封した「脊髄損傷」のパンフレットは、日本せきずい基金の監事である菅原崇弁護士による法律相談のご案内です。菅原弁護士は自らも頸髄損傷者で、これまでさまざまな困難を乗り越えてきました。脊髄損傷のために法律的な問題を抱えて困っている方々のために、当事者ならではの視点をもってお応えします。

皆さまのこれまでのご支援に、一同、厚く感謝申し上げます。そしてこれからも末永くお見守りいただけますようお願いいたします。ご寄付はこのページ下段に記しました3つの口座で隨時受付けています。



We Ask You

日本せきずい基金の活動は
皆様の任意のカンパで支えられています

● 寄付の受付口座

郵便振替 記号 00140-2 番号 63307

銀行振込 みずほ銀行 多摩支店 普通1197435

楽天銀行 サンバ支店 普通7001247

口座名義はいずれも「ニホンセキズイキン」です。

発行人 障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷3-1-17
ヴェルドゥーラ祖師谷102

編集人 特定非営利活動法人 日本せきずい基金・事務局

〒152-0023 東京都目黒区八雲3-10-3-104

TEL 03-6421-1683 FAX 03-6421-1693

E-mail jscf@jscf.org HP <http://www.jscf.org/index.html>

*この会報は日本せきずい基金のホームページから、無償でダウンロードできます。 頒価 100円

★資料頒布が不要な方は事務局までお知らせください。